

新

# ああ、猪猟 泣き笑い



訓練は「つなびぎ」が全てである

新たな狩猟人生の旅立ちに

## 1 実践 俺流「単独猪猟」

川崎市 田宮 治

### ◎たかが狩猟、されど狩猟

「趣味」と言うからには、一級品でなくてはならない。自らの狩猟技術はもとより、愛犬の猟芸、猟友に至るまで一級品を求める姿勢が必要であろう。その中にあって一番大切なことは、狩猟をする「心」である。銃を持って狩野を自由に狩り込める特権と、野生鳥獣の尊い命と引き替えに成り立っていることを忘れてはならない。

このことを前提に、猪の単独狩猟について、私が今日まで実践してきたこと、実践していることを述べてみたい。あくまでも私の独断と偏見であるが、実体験から会得したことであり、大物猟をやり始めた人や、壁にぶち当たっている人達の参考になれば幸いである。

### ◎まず1頭を自力で獲る

単独で猪猟を目指すのであれば、まず全力で1頭のイノシシを撃ち獲ることである。猟人も愛犬も、この1頭によって猪猟の「醍醐味」を知り、見違えるように成長するのである。イノシシの追い詰め方、寝屋場、その他細かいこと：等々、この1頭の体験が基になっていく。どんなに立派な猟人でも、この初

猟(初獲物)の興奮は生産されることはない。そして、その後は多少の紆余曲折はあっても、順調にイノシシが獲れたであろうし、愛犬も猪犬然としてきたに違いない。

大物猟は、決してたやすいものではない。特に、単独狩猟ともなればなおさらである。猪猟の何たるかを知り、猟場で起こるあらゆる事態に対して即決、行動しなければならぬ。何もかも、自身と愛犬の力によってのみ結果が得られるのであり、一朝一夕には成功などあり得ない。

単独猟を極めるには、挑み続け、こだわり続け、何が何でもやり遂げる：努力と根性以外にない。

このような表現で説明しても、人それぞれの考え方や猟法の違い、そして何より育った環境によって、身につけた猟知識も違っており、私の考えが理解してもらえないことも多々ある。

私は、本誌への寄稿が縁となり、読者の方々と親しく猟談させていただくようになった。その中で、自分にとっては当たり前のことでも、相手には理解されていないこともあった。どのように説明したらよいのだろうか、伝えることの難しさを痛感した。

時に、私の思い違いもあった。「単独猟をやりたいので、止め犬が欲しいのですが?」の問いに、私はこの方は、グループ猟とか単独猟で一応「極めた」方であろうと思つて話していた。少なくとも「大物猟を単独で」と言うからには、猟においては何事も1人でやれるものと思つていたので。

ところが、この方は子犬の基礎訓練である「綱引き(つなぎ)」の意味もわかつていなかった。子犬時の綱引きは、その犬の生涯を左右する最も大切なことであり、「戻り」の良い犬にするための大切な訓練である。

このように言うと、何を偉そうに:~と思われるかも知れないが、決して相手の無知をバカにしているのではなく、これから単独猟に挑もうとする方々の、先々の失敗を見ていられない:~との思いから、あえて述べさせていだいた。

かく言う私も、満足できる愛犬群ができるまでは、失敗と挫折の連続であった。イノシシは年に6~7頭(それ以下のときもあった)で、苦労も努力も実を結ばず、「もう、やっつけられない」と思ったことも何度もあった。そんなときに犬舎に行くと、何の疑いもなく私

に飛びついてきた愛犬達。その目を見て、われに返つたものである。

単独猟は「自分と愛犬でやる」ところに意義があり、それだけに奥が深く、楽しみ・喜びも大きい。素晴らしい猟を、いとも簡単にやつてのける名人・達人であつても、失敗や挫折はつきものである。「失敗を恐れぬ挑戦心」こそが成功のカギであり、獵人として歩んだ道のり(体験)が財産になる。

振り返れば、私とて愛犬のお蔭でイノシシを獲らせてもらつていただけなのかも知れない。

### ◎雪国・新潟で学んだこと

誰でも生まれた故郷は懐かしく、かけがえのないものである。少年の頃に川や海で遊んだことなどは、人生を通じて生き様の根本をなすように思える。イノシシの単独獵人としての現在の私があるのは、全てこの頃に覚えたものが根底に流れている。

特に父や兄からは、今は死語と化した「根性」を徹底的に叩き込まれた。私が「誰にも負けない」と自負していることは、子供の頃から山に入って学んだ「山を知り、自然を知る力」と、猟で学んだ多くの「体験」である。

私が育つた所は、イノシシもシカも、キジまでもいない雪の深い山里だが、水は清く澄み、イワナにヤマベ、自然遡上のアユとサケまでいた。山での猟の大物はクマで、「秋田マタギ」と並ぶ新潟のマタギ集落で知られる所である。

そうすることが当然のように、小学校3年生の頃からヤマドリとノウサギ猟をする兄達の後を追つていた。毎日、犬を引き連れ、おにぎりを入れたリュックを背負い、1本のシノ竹を杖代わりに、ヒョイヒョイと兄達が残したカンジキの跡を拾つて、1日中歩き回るのだった。まるで「ノ野を越え、山越え:~」であつた。

泣き出したくなるような極寒の中で、突然飛び出すノウサギやヤマドリを兄達の銃声で気づく。泳ぐようにして雪をラッセルする犬の後を、これまた泳ぐように必死に追つて、獲物の落下地点まで拾いに行く。獲物が見つかる、背負つていたりリュックを放り投げ、「あつた、あつたよ」と、大声を上げて喜んだものだ。

当時は、今では到底考えられない、長靴さえもない物不足の時代であつた。父が作ってくれたジンベ(藁で作つたスリッパのような

履き物)を履き、踵にはチーハン(布で作つた雑巾のようなもの)を巻き、ハバキ(脛巾)を膝下に巻いての雪中猟だった。

雪が早く降るこの村回りでは、猟期中はほとんどこのような状況の中で猟が行われていた。夕方ともなると、藁靴はぐつしり濡れ、そのうえ気温も下がる。立ち止まつて、犬がノウサギを追うのを待つていると、「バリツ」と音がするほど凍りついた。着る物も手袋も、何もかも:~ろくな物がなかつた時代で、厳しい寒さは、根性と有り合わせの物を工夫して凌ぐのであるが、小さい身体にはこたえた。



必ず1頭に長めの綱を付け、1頭は放す(番号と奈智号)

それでも幸いなことに、ヤマドリやタヌキ、ウサギやテンに至るまで獲物の豊かな山で、「カラ戻り」など全くない……と言ってよいほどの好猟場だった。

こうして、父や兄達の後ろを追うことで、私なりに「猟の何たるか」を覚えていった。特に、メンタルな部分で「辛さ」を凌ぐ我慢を学んだ。辛さをこらえ、狩猟を楽しいものにする根性と、獲物はとことん追い詰めて撃ち獲ること、犬の育て方など、知らず知らずになんて覚えていった。

愛犬についても、わが家で子を取って、何代も育て上げたが雑種だった。当時は、それらの犬達を雑種とは思っていなかった。鍛え上げられた猟芸は一級品で、毎日の猟には欠かせない相棒で、一流犬と思っていた。雪のない山でウサギを追い出せば、何回でも同じ所に回してくれ、必ず撃ち獲らせてくれる犬だった。なにぶんにも物不足の時代で、愛犬も何頭も飼ひ置けず、2〜3頭の犬を上手に引いて使う以外なかったのである。こうして私なりに、猟具にしても、「ある物を工夫して上手に使う」とことと、愛犬にしても「野山に引いて一流芸にして使う」とこと

を身につけたのである。

何も無い。あるのは、有り余るほどの大自然だけだった。私は、そこで学んだ。今ある物を工夫して、一流までに仕上げたて使うことを。これこそ、いつの時代にも通用する「狩猟の心」ではないだろうか。豊かになりすぎた時代は、「ポイ捨て」を生み出した。悲しみがきりだ。

何事を成し遂げるにしても、その方法も速さも人によって違う。大切なことは理想を高く掲げ、努力し、夢に向かって邁進すること。夢は、見るためにあるのではなく、実現させるためにあるのだ。私自身、夢の一端でも踏みしめたいと思っている。

### ◎好きこそものの上手なれ

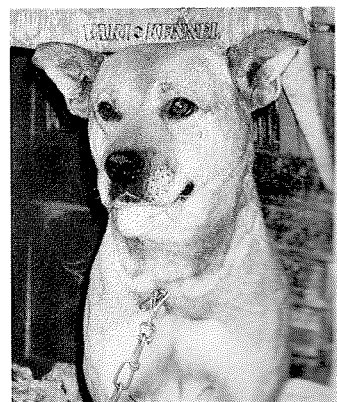
では、どうしたら「猪狩り」が上手くなるのか。「好きになること」である。犬であれ猟であれ、まず「バカ」と呼ばれるほど好きになることである。このことを前提にして、単独猟(初心者)における必要事項を具体的に述べてみたい。「単独猪猟」と言うからには、1人でどんな荒猪でも撃ち獲れなくてはならない。この猪猟について、本誌でも多くの方が猟法を述

べられているが、実に様々な意見があり、よほどの獵人でなければ全てを理解することは難しいと思われる。つまり、いかなる教訓もある域に達した者でなければ、その真意を読み取ることはできないのではないかと思うのである。

そこで……である。単独猟で「上手くないか」と嘆いている方々にお訊きしたい。あなたは、本当に猪が好きですか？ 犬がどれほど好きですか？

「何をくだらないことを……」と思うなら、次のことを思い出してほしい。私が「好きでなければ、やっていられない」と言うのは、例えば愛犬の餌やり、糞掃除に始まり、非猟期の自己管理や愛犬の訓練、猟場で起こる猪猟に関係のないことまで、全て1人でやっていく覚悟と自信がなければできないということである。

犬がイノシシに裂かれたら、自分の手できちんと処置(縫合など)できるだけの知識と技術がなければならぬ。犬も黙って主人の処置を受けるまでに仕上げたい。目の前で起こるいかなる状況・事態にも、落ち着いて素早く対応することが大切であり、それが「安全狩猟」につながるのである。



単独猟の妻、咬み一歩の犬

主人の不安な態度は、愛犬にも伝わる。慌てて他人に頼ったり、すぐに病院に駆け込むようでは、単独猟者としてはまだまだである。もちろん、大ケガで手に負えない場合もあるが、裂かれた犬を山で素早く縫って処置できれば、それだけ治りも早く、何よりも自身の自信になり、良い猟ができる。

イノシシの単独猟は、経験に裏打ちされた獵人の技(実力)がものを言う。単独猟を成功させられるのは、グループ猟で言うなら「勢子長」格の方くらいではないだろうか。何十年「タツ」を張っていても、その経験だけでは単独猟では苦しむことになる。

### ◎こうすれば獲れる

難しいことを書き綴り、単独猟を志す方の「やる気」を削ぐのは

本意ではない。ここでは、「こうすれば、イノシシは獲れる」といったことを易しく述べてみたい。

その(一) **「テキる単独獵人の技を見たり聞いたりして、それを真似ることから始める。」**

その(二) **「愛犬の仕込み・訓練も全く同様であるが、基本となるのは、「これだ」という子犬を求め、綱引きから始め、獵期まで黙々と飽きずに山入りすること。」**

それでは、「田宮流単独猪獵」を公開する。ただし獵好き、犬好き、山好き……の方が対象であり、そうした方々の獵人としての技術、人格を踏まえたうえでの記述になる。

私の場合、猪獵における「師匠」と呼べる人はいなかった。つまり、全てが「我流」であり、私が今日まで残してきた結果が証しだと思っている。細かな部分は省略し、「こうすれば、1年でイノシシを撃ち獲れ、3年後には一流の猪獵人になれる」ということを述べてみたい。同じやり方で「流し獵」をしてみることを勧める。

### ■田宮流「単独猪獵」

車に犬(3〜5頭)を乗せ、「ここだ」と思った獵場(山)に向かう。林道を注意しながら、車止めまでゆっくり走り、イノシシの掘り跡

(食み跡)や、「渡り」を見落とさないように探す。何もなければ、次の山へ移動。そして、同じことをする。

「跡」を見つけたら獵支度。愛犬にマーカーを付けて放犬。その後から、ゆっくりと歩き、山や小峰の状況を見回して、イノシシの居場所を「予想」する。この予想は、慣れてくれば「当たる」ようになるので、必ずすること。イノシシの寢屋が予想↓特定できるようになれば、愛犬の誘導や狩り込みが断然有利になる。「寢屋の特定」が飛ばれてしまうか、撃ち獲れるかの重要な決め手になる。

寢屋が特定できたら、初めは大変だが、山の上のほうから犬を掛け、寢屋を目指す。多少、予想が外れても(いつ飛び出されても)対応できるように、十分用心しながら狩り込む。この場合、愛犬の動きが全てであり、仕種や鳴きに注意を払って覚えること。慣れてくれば、愛犬の動きと鳴きで、「起こした」「飛ばれた」「止めた」など、全てが判断できるようになる。

なお愛犬は、あくまで車を止めた場所から放して狩り進み、犬も主人も車の所へ戻るようにする。この繰り返しだが、愛犬を必ず放犬

場所に戻す訓練にもなる。実戦において、繰り返し教え込むことが最良であり、自分なりの狩り込み方を決めて繰り返すことである。

これが愛犬頼りの「流し獵」だが、初めはこれで十分である。車から降りて、イノシシがいることを確認したら、愛犬にマーカーを付けてその場から放犬。林道や沢伝いに大峰を目指す。大山の場合は、小峰を横切るようにして、その山の七合目辺りの獣道伝い(特に出峰の周りは注意)に、グルツと回り込むように狩り込んで行く。

全てが犬任せであるが、慣れにくると寢屋場はもちろん、イノシシの飛ぶ方向も予想できるようになる。また、愛犬を遠くへ行かないように呼び戻すのは、口笛や身振りで行い、大声は禁物である。「寢屋場」と思う所では、必ず上から攻めること。そうすれば、60〜70%の確率でイノシシに出合える。

愛犬の「寄せ鳴き」(ワン・ワン・ワン・ワン)が始まったら、犬群の力が弱い(出来上がっていない)場合は、イノシシは必ず上にトコトコ上つて来るので、少し高い所でじっと待って迎え撃てばよい。

反対に、犬群が強い場合は、間違ひなくすぐ下の谷へ落とされ、

止められる。犬にもよるが、ギャングヤン、ワンワン大騒ぎになるので、鳴き声を頼りに素早く駆けつける。この場合でも、寄り付きは必ず上か横からで、絶対に下から近づいてはいけない。そして、周りに人はいないか、危険な物はないか:落ち着いて確認しながら近づくことである。

追い落としで止めているので、犬群の力が勝り、イノシシはしばらく動かないので、鳴き声のする谷底や大岩の前をそっと覗くと、ピンと背毛を立てた大猪(?)がカラ威張り(威嚇)しているはずである。谷まで落ちずに、山のたるみ部分の大木や大岩を背にしていることもあるが、どんな場合でも慌てずそっと近づき、イノシシの「頭」を狙って、ゆっくり引金を引く。

このときが、猪獵において一番ときめく場面であり、万感迫る瞬間であるが、念には念を入れて、「人ではないか? 確かにイノシシか?」「イノシシの陰に犬はいないか?」「岩や石で、跳弾はどうか?」などを見極めたうえで、1発で仕留める。犬さえ良ければ、1mほどの付け撃ちか、せいぜい10mまでの撃ち込みなので、仕留



期待の子犬達。もうすぐ耳がピンと立つ

め易いはずだ。

初めは、やれ射撃がどうの、見切りがどうの：などと考えずに、気楽にいくことである。射撃も見切りも重要な要素ではあるが、それらは経験を積んで行くうえで覚えていけばよいと思う。

それよりも、イノシシが寝ていた「寝屋場」をすっかり覚えることが大事である。良い寝屋場には、一度取り逃がしてもまた戻るし、例えそこで撃ち獲っても、また別の機会にイノシシが入っているものである。

また、慣れてくると「イノシシが寝ているとすれば、ここ以外に

ない」とか、実戦でイノシシを追っている中で、「犬の掛け方」や「イノシシの跳ぶ道」「止まる場所」がわかるようになり、それらを正確に覚えることがイノシシ捕獲の近道である。当然のことだが、実戦では相手(イノシシ)の習性や行動を知ることが大切である。

単独で猪猟を楽しむには、このようにして、まず初めの1頭を獲ることである。この1頭が頂点を目指す大切なステップになるので、自分に合った猟計画を立て、焦らずに一つひとつ覚えていくことである。

### ◎2年にして極めた猟友

たかが猪猟：である。本誌の記事や、できる猟人の実戦での猟法をしっかりと見て覚え、わからぬことはよく訊く。そして2年もすれば、ここまでできる：という実例を紹介する。

群馬県のK氏と彼の義兄A氏だが、2人は協力し合いながら、実に素晴らしい猪猟をしている。共に探究心が強く、何よりも「犬好き」「猟好き」である。そのうえ、川でのアユ釣りも楽しみ、自然のアユを求めて私の生国(新潟)の大河や秋田まで出向いている。A氏

は私と同年齢であり、生きてきた時代も同じ、考え方も共通していることから、ビールを飲みながらの猟談義は尽きることがない。

今回、A氏の山荘に2泊して共猟したのだが、「これが大物猟2年生なのか」と驚くほどの上達ぶりであった。すでに教えることはなく、ある面では私を超えている。その最たるものが愛犬達。「犬こそ単独の要」であるが、実に素晴らしい愛犬群である。バリバリの若犬揃いだが、その中の先犬「コブシ号」は、今は亡き私の宝犬「ミス号」と先犬「ブル号」の子であり、猟芸は一級品である。

2人の使用犬(二軍犬)は、全て四国のN氏が手塩にかけて仕上げた強力な「咬み止め犬」軍団。この犬達の猟芸をひと目見ただけで、猟友N氏の犬に懸ける情熱が伝わってくる。「俺の犬が群馬に行つたので、面倒見てくれんか？」との一報でK氏とA氏を知ったのである。

2人の猟を支えているのは素晴らしい犬群だが、私が驚かされたのは、2人の猟に取り組む姿勢である。まず、猟人なら誰もが夢見る山荘を作り、仲間の輪を広げ、心を豊かにしている。そして、並

みの猟人には到底できぬであろう9頭の子犬を求め、今更(18年度)までに仕上げたのである。山荘には、水洗式の犬舎に加え、イノシシの解体小屋や、バーベキュー用の別舎があり、山荘周辺には、自前の野菜畑もある。

何よりも、そこからの眺めが素晴らしい、このような風景(自然)の中で、猟のことをあれこれ考えられたらいいだろうな：と思えるほど充実した猟人生を送っている。

2人は実猟において、何事も自然にこなしており、安心して見ていられた。どのような大猪でも、2人のコンビで撃ち獲っているのだ。「よくぞ、ここまで頑張ってくれました」と、本当に嬉しかった。では、何が2人をここまで成長させたのか。2人との共猟で実感したことを述べてみたい。

まず、毎日のように猟に出かける。車で林道を流しながら、目ざとくイノシシの渡りを見つめる。車を降りて食み跡や渡りを確認する。念のために私も降りて見たが、確かに夕べのものだった。沢筋でも小峰周りでも猪猟に集中し、一生懸命協力して狩り進む2人のイノシシを追う姿に打たれたのである。



これほどの大物(160kg)をあっさり撃ち獲ったK氏  
(筆者の立場がない?)

さらに、K氏の努力が目につくように、見事に育て上げられた9頭の愛犬のうち4頭は、私の一軍犬にピッタリと付いて、見事な狩り込みを見せていた。皆、「コブシ号」が基をなしている犬達であり、素質は十分で、先行きが楽しみである。「Kさん、よく仕込みましたね」と言うと、「田宮さんにそう言われると、本当に嬉しいね。今日はケガで連れて来ないけれど、田宮さんからいただいたサブ号もこれ以上だけどね」との答え。

私が本稿でK氏とA氏を例に挙げたのは、まず子犬を上手に仕上げたこと。そして、成功(猟技の完成)したのは、人の話に素直に耳を傾け、良いと思ったことは積極的に取り入れ、忠実に実行したこと。だと思ったからである。また、後に知ったことであるが、大猪に立ち向かう度胸は、北海道でヒグマを撃ち獲った体験によるといふ。長い間の鳥獣の経験も活かされているようだ。

それらの体験・経験を、地元の人達も知れない。しかし、立場はどうあれ、ひとたび猪猟を目指したからには、並大抵の努力では達成できないことを知ってほしい。また2人は、共に愛妻家であり、内助の功に感謝されていた。

### ◎犬が全ての単独猟

イノシシは、猟人の腕(技術)で獲れると思いがちだが、グループ猟ならいざ知らず、単独猟では「犬が獲らせてくれる」のである。どんなに頑張ったところで、犬が止めてくれないことには始まらない。「よし、出たぞ!!」そんな一瞬の

緊張は、手塩にかけて育てた犬群によってのみ味わえる。いとも簡単に撃ち獲れるのは、犬群が力でねじ伏せ、クギづけにするような止めがあるからである(鳴き止めは別)。

その犬群の猟芸であるが、かねてこう思っている。若い40代頃までは、愛犬のレンジが広くてもよい。しかし、50、60代になるにつれ、自分に合った愛犬を作らなければならぬし、そのような猟芸の犬でなければ、絶対に1人では獲れない。当然のことに、70歳になつた私は、犬を止めたら簡単に移動させない止め芸の犬作り:ということになる。

年齢・体力にそぐわない犬作りでは、失敗の山を築くことにもなりかねない。「猟を極めるうえで、失敗や挫折は必要」とは言っても、この歳では遠回りはできない。これから単独猟を始める方にも、できることなら失敗や挫折を味わってほしくはないと思っている。繰り返す。単独猟はイノシシを止めおく愛犬作りである。この一点に努力を集中させるべきである。犬作りは、子犬を求めることから始まり、その訓練法、猟芸、交配方法に至るまで様々な意見があり、

一概に「これだ」と断言できないが、そうした中で私が言いたいことは、目指す狩猟方法や、年齢・経験などによって自分に合った子犬を選び、飽きずに懲りずに引くことである。

身近の子犬を工夫しながら一流犬に育てて使った時代から見れば、今はお金さえ出せば素晴らしい子犬(全てではないが)が手に入る。それらを求めて育てるのもよいであろう。子犬選びも大変であるが、縁あって手元に来た子犬は、努力して工夫して一流芸に仕込んで使つてほしい。

子犬の仕上りの善し悪しは、猟人の猟技術に裏付けされた人格に加え、犬に対する思いやりが大きく影響する。素晴らしい猟人には、素晴らしい犬群が揃っているものである。訓練にしても犬作りにしても、並みの努力でなし得るものではない。単独猟には、まず一流犬ありき:で、こだわりの猪猟、納得の猪猟を目指すなら、一級品の猪犬を作るのである。(つづく)

\*ご意見のある方は、ご連絡ください。  
TEL 044-944-3220